

南ぬ風

Vol.21

2011.10~12

秋号



【南ぬ風インタビュー】 植物コレクションの充実と沖縄独自の植物の研究を進めてもらいたい。

千葉大学大学院園芸学研究科教授(植物細胞工学研究室) 農学博士 / 三位 正洋

《沖縄の色・形》 普段着として織られてきた素朴な伝統織物 八重山交布



ふしぎがいっぱい
公園点描

海洋博公園

ジトゥーデーヌヤー

地頭代の家

おきなわ郷土村の入口から遊び庭を抜けた場所にある地頭代の家は、地頭代と呼ばれる各村々(現在の字に相当する)の地方行政を担った地頭(領主)の代官が住んだ家を再現しています。地頭代は、首里王府の指揮監督をうけていろいろな令達を執行し、耕地の配分(地割など)や林野の保護、諸税徴収、上納等、もろもろの行政を管理する役割を持っていました。おきなわ郷土村の地頭代の家は那覇の町百姓の地頭代の家をモデルにしており、景観や火災防止のために赤瓦葺となっていますが、他の農村の地頭代の家は家屋制限令によりすべて茅葺でした。

ふえー 南ぬ風

誌名『南ぬ風（ふえーぬかじ）』について

「南ぬ風」は梅雨明けとともに南から吹き込んでくる強い風のことです。この南の風によって育まれてきた沖縄の自然や文化をさらに「南ぬ風」に載せ全国に発信することを意味しています。

この度の東日本大震災により被災されました方々に心よりお見舞い申し上げます。
被災地の一日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。

C O N T E N T S

南ぬ風インタビュー Vol.14 3

植物コレクションの充実と沖縄独自の植物の研究を進めてもらいたい。

千葉大学大学院園芸学研究所教授（植物細胞工学研究室）農学博士 / 三位 正洋



沖縄の色・形 6

普段着として織られてきた素朴な伝統織物 八重山交布（やえやまグンポー）

取材協力/次呂久幸子



事業紹介 8

公園等の管理運営 熱帯ドリームセンター 展示会
視覚・触覚・味覚で、熱帯果実の魅力を伝える。

調査研究事業

公園内の野鳥確認調査/ミナミバンドウイルカ調査/調査船「第二黒潮丸」の導入/戦前の南殿の様子 國吉シヅさん聞き取り調査より

普及啓発事業

専門家講習会「沖縄の植栽土壌に関する講習会」/サンゴ礁自然誌講座「海草と海草も場の生物観察」/夏休みこども自由研究in コンベンションセンター2011



沖縄の自然 南の島の植物と動物たち 14

シリーズ 沖縄の大木⑭ ミフクラギ

シリーズ 沖縄の希少動植物⑭ タイワンシシラン/アオウミガメ

沖縄の民話 16

蠅が手を擦り合わせるわけ

資料提供/NPO法人沖縄伝承話資料センター



ニュース&イベント情報 (10月~12月) 18

総合研究センター、首里城公園管理センター、
海洋博公園管理センター

ふしぎがいっぱい公園点描 20

海洋博公園 地頭代の家



表紙について

黄色い花の咲く場所から

名嘉陸稔（なかぼくねん）

一九五三年伊是名島生まれ。

版画家。造形作家。月桃紙に

裏手彩色と呼ばれる技法で

制作される作品群は、われわ

れ現代人が見過ごしてしま

がちな大自然の機微、生きと

し生けるものの魂の声を、時

に優しく、時に力強く、私達

に伝えてくれる。



紫色のダリア

—植物細胞工学とは、どのような研究になるのでしょうか。

三位 いろいろありますが、バイオテクノロジーを品種改良に応用して何ができるかというようなことを行っています。例えば遺伝子組換えとか、植物の葉っぱの一枚を取って試験管の中で細胞を増殖させて芽を出させるとか、これは組織培養という技術を使いますが、そんなことを行っています。

— 一つ多くやっているのは遺伝子組換えで、現在、我々の研究室には学生や研究員など40人近くの人がいますが、そのうちの3分の2ぐらいは遺伝子組換えに取り組んでいます。ターゲットは花が多いんですが、他にも薬用植物や林木、バイオマスやバイオエタノール植物などの研究も行っています。

— 花の研究では、どのようなことをされているのですか。

三位 遺伝子組換えで、紫色のダリアを作りました。花色で有名なのは「サントリー」が作った青いバラがありますが、我々もダリアで同じようなことをやりました。ただ、ここは元々品種改良をやる研究室ですので、遺伝子組換えだけでなく、異なった種同士での交配、雑種を作るといったこと

植物コレクションの充実と 沖縄独自の植物の研究を 進めてもらいたい。

バイオテクノロジーを駆使して、様々な植物の育種改良に取り組んでいる三位教授に、その研究内容や植物の可能性について語っていただきました。



千葉大学大学院園芸学研究所教授(植物細胞工学研究室) 農学博士

三位 正洋 Mii Masahiro
(海洋博覧会記念公園管理財団総合研究センター研究顧問)



[みい まさひろ]1947年東京生まれ。千葉大学園芸学部を卒業後、名古屋大学大学院農学研究科で博士課程を修了し、名古屋大学農学部助手を経て1977年より千葉大学大学院園芸学研究所に勤める。専門は植物細胞工学、植物育種学。常に実際に役立つ植物の作出を目的に技術開発を行っており、最近では林木や薬用植物、石油代替作物にも研究対象を広げつつある。2011年(財)海洋博覧会記念公園管理財団総合研究センター研究顧問。著書に『夢の植物をつくる(単著)』『ファレノプシス:栽培と生産(共著)』『植物育種学各論(共著)』などがある。

もやっています。

例えば、チョコレートコスモスとキバナコスモスの雑種でオレンジ色のものを作りました。それから、サクラソウの仲間でウンナンサク

ラソウとプリムラ・シネンシスという種類の雑種を作ったら、花付きがよくて丈夫なものができました。それは「プリムラ31」という名前です。登録されて種苗会社が販売してい

ます。31は私の名前の「三位」にちなんで種苗会社が適当につけたんですけどね(笑)。もう一つ商品化されつつあるものに沖縄のリウキウベンケイ

※2)バイオマス
ある時点にある空間に存在している生きた生物体の量。生物体量、生物量、現存量ともいう

※1)バイオテクノロジー
生物の行う化学反応、あるいはその機能を工業的に利用・応用する技術、ないしその技術体系

があります。リュウキュウベンケイの野生種は絶滅危惧種ですが、カラシコエという属の中で雑種ができるかどうかをやってみたくです。すると、草丈が高く花の色が多いものや八重の花などいろいろできまして、それは今、海洋博覧会記念公園管理財団で試作されています。これらは私の研究目的の一つでもありまして、絶滅危惧種を保存し、生かすという意味で、品種改良にどれだけ使えるかを試しているわけです。

遺伝子組換えは品種改良に使える手段の一つ

——何と何を交配するかは、どのように決めていくのですか。
三位 分類学などの基礎知識が必要ですが、慣れてくればある程度は直感です。種としては近いほうがいいんです。離れているとそもそも受精なんかしません。例えばカラシコエは一つの属ですけど、その



(上)遺伝子組換えでできた紫色のダリア
(下)試作中のリュウキュウベンケイの交配種

また遺伝子を組み入れるターゲットの品種を決め、その細胞から植物体が再生できるようにする必要があります。その先にも遺伝子を組み入れるのが難しかったです。

中にある別種同士の雑種ができるかどうかという話になります。
——遺伝子組換えと交配の違いはどのような点ですか。
三位 例えばコシヒカリという稲があつて、病気に強いものを作ろうと思つたら、病原菌を殺したり進入を防ぐ物質を作る遺伝子を探してくればいいわけです。そうして作られたものは、病気に強い性質だけが付け加わつて、コシヒカリの持っている基本的な性質はまったく変わります。遺伝子組換えにはそういうメリットがありますが、それ以外の予期せぬ結果を期待することはできません。それに比べ交配は感覚的で、こっちの花の色とあつちの花の丈夫さを兼ね備えたものができないかと、ある程度のことを想定して交配しますが、全然予想もしていなかった性質が出現することがあります。

それと、遺伝子組換えの場合は、まず遺伝子を組み入れるターゲットの品種を決め、その細胞から植物体が再生できるようにする必要があります。その先にも遺伝子を組み入れるのが難しかったです。

三位 遺伝子組換えの実用化については、法律で厳しく規制されていてハードルが高いんです。しかし、遺伝子組換えは今後の我々の生活に必要な技術ですし、社会に受け入れてもらえるような努力を研究者としてははたしてはいけません。組換え植物の重要性を誤解がなく理解してもらえらるような、その糸口になるような組換え体を作つていきたいと思つています。

含量を増やそうとしています。遺伝子組換えで合成量を増やしたり、通常2倍体の染色体を4倍体にして含量を増やそうとしています。
——エネルギーや食料に関連するものはどうですか。
三位 東南アジアで育つキャッサバがあります。あれはデンブ用の飼料作物でアルコールができるので、バイオエタノールの有力候補になっていきます。それからヤトロファという植物もあります。中南米の原産でナンヨウアブラギリという和名があります。あとはスキの類のジャイアント・ミスカンサスや、熱帯に育つエリアンサスやネピアグラスなどが我々の研究テーマになっています。

食料に関しては、アスタキサンチンという抗酸化物質があります。カニを茹でると甲羅が赤くなりませんが、あれはカニが摂取している微生物が持っているカロチノイドという色素で、そのカロチノイドの一種がアスタキサンチンです。それを使って機能性の高い、食べると健康になる野菜を作ろうと研究を進めています。

一年で実を付ける果樹

——今後の研究のテーマとしてはどのようなことを考えていらっしゃいますか。



実験のための植物や交配後の植物を栽培している温室

三位 桃栗三年柿八年といいますが、その遺伝子を使うとナシやリンゴでは種を播いて一年目に花をつけさせることができます。それで一年で実をつけるようになったら、種

り、遺伝子がちゃんと働いてくれなかったり、相性がよくなかったりとかいろいろ難しい問題があります。さらに、例えばターゲットの品種に青い花ができたとしても、最初は珍しがられますがそのうち注目されなくなります。そうならないためには、既にできている青い花を別のものと交配をしていく必要があります。交配すれば、予期していなかった鮮やかな青で多様な花型の品種ができる可能性があるわけで、その面では従来の品種改良の方が効率がいいということになります。遺伝子組換えは、品種改良に使える新たな素材を作るための一つの手段と考えたほうが良いのです。

植物の遺伝子の数はどの程度分かっているのですか。

三位 植物の種類によつて違いますが、一つの種が持つ遺伝子の数は2万〜4万ぐらいと言われています。遺伝子には読み始めと読み終わりを指示する配列があつて、読み始める部分が幾つあるかを調べるとどれくらいあるかが大体分かります。こういう研究に適した植物の代表として、今、みんなが共通に扱っているものにシロイヌナズナというアブラナ科の植物があります。この植物は細胞あたりのDNA量(ゲノムサイズと言います)が高等生物の中では最小の部類に入り、この中に生きていくための必要

を取つて播いてを繰り返すと理論的には一年草と同じ品種改良ができ、遺伝的に純粋な品種ができるわけです。果樹は遺伝的に純粋ではありませんから、ある品種の種子を播いても親と同じ個体は得られませんが、この場合は播いた種子で同じ品種の果樹栽培ができるようになるんです。

これも特定の遺伝子を見つけて取り出すという技術が進んで発見されたものです。植物の基礎研究の領域の人たちは、そうやっていろんな遺伝子を見つけていますから、我々は応用の場において、使えそうなものを目ざとく見つけて利用していきたいと思つています。

植物での話題づくりが必要

——最後に当財団に対するアドバイスなどありましたらお聞かせください。
三位 やはり、人を集められるような植物での話題づくりが必要ですよ。もちろん野生のものでもいいんですが、新たに作ったものを見せて、しかも、沖繩に自生する植物を利用して作った植物を特産品として商品化することができればいいなと思います。

それと、沖繩の植物を調べていくと、県外にある植物と同じ学名がついていても、これは別種だと思える

最低限の遺伝子を持つていますから、効率よく遺伝子を探すことができます。しかも、草丈が小さくて大体2カ月ぐらいで種子が取れるんです。単純計算しても1年で6世代の交配結果を見られますからすごく便利なんです。こういうことからモデル植物として世界中で利用されています。

有用成分の含量を増やす

——我々の生活や暮らしに関わる研究にはどのようなものがありますか。
三位 熱帯の造林に適したアカシアがありますが、遺伝子組換えで材質が良く病気にも強いアカシアの研究を進めています。それから漢方薬に使われているカンゾウもありません。日本でも栽培できますが、薬用成分が少なく、遺伝子組換えで含量を増やす研究を進めています。それから、タイと共同研究で進めているものにアルテミスシア・アナアというヨモギの仲間があります。アルテミスニンという成分が含まれていて、キニーネに代わるマラリアの特効薬として注目されています。ただ、人工合成ができなくて栽培植物から抽出しなくてはなりません。含量が少なく、育種によって



(上)組織培養室で培養中の植物について説明する三位教授
(下)組織培養の作業と培養されている植物細胞の塊(カルス)

ようなものがたくさんあります。例えば、関東近辺だと梅雨の初め頃に白い花をつけるエゴノキというのがありますが、沖繩にある同じ種類のものをもってきて挿し木をしたら花が咲いたんです。それも蕾を出したのは12月の初めごろで、しかも常緑なんです。そんなものが結構ありますので、そういうものを使って品種改良すると面白いものができるのではないかと思います。そのためには、やはり植物コレクショナルをもっと充実させて、沖繩独自の植物の研究を進めて欲しいと思います。

(平成23年8月1日 千葉大学大学院園芸学研究所「植物細胞工学研究室」にて)

※3)4倍体
通常、染色体は母由来の1組と父由来1組がセットになっている2倍体(2組)だが、4組にセットしたものの2倍体と4倍体の交配からは3倍体が生じる。3組以上の染色体をもつ個体を倍数体という。偶数倍数体では実や種が多くなり、奇数倍数体では逆に少なくなるといわれている。"種なしスイカ"は3倍体として知られる



「葉の裏側に面白い模様できました」とベゴニアの雑種を手にする三位教授



グンボアの反物。落ち着いた色合いにシンプルな柄が特徴

伝統行事と結びついた織物

交布は経糸と緯糸の種類が違う織物です。特に木綿の経糸に苧麻の緯糸を織り込んだものは、肌触りも良く着心地が良いといわれています。木綿と芭蕉糸や絹を交織したものもありますが、現在は化学繊維も使われています。

『竹富島方言辞典』によると、グンボアと長音にするのは近年からで、お年寄りには「グンボ」と発音するそうです。交布の歴史は定かではありませんが、琉球王府時代に八重山上布が貢納布となり、庶民は着ることができなかつたために、普段着として織られたものだといわれています。ただ、交布は豊年祭などの行事と深く結びついており、着物の原点だとい

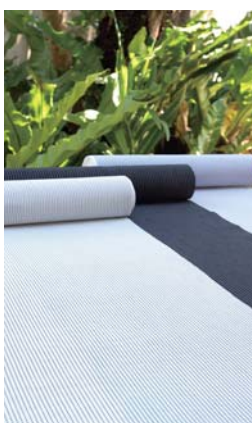
苧麻のことを八重山では「ブー」と呼んでいます。和名は「カラムシ」でイラクサ科の植物です。その「ブー」を刈り取り、皮をとって皮刀で十分にしごいて繊維をとり出し、それを湯通ししてヌルヌルした皮肉をすべて取り除きます。その繊維を水に濡らして一本ずつ指先で裂いて糸にします。さらに、その糸を紡いで一本の長い糸に仕上げます。手間がかり、根気のいる仕事ですが、糸の出来具合が仕上がりを左右することから手抜きはできません。

「交布は庶民の普段着ですから、できるだけ安い糸を使いたいということがあります。綿は他所から手に入らなければならぬのでお金がかかります。それで綿を節約するために麻を混ぜて使うようになったみたいです」。染料も、黒は藍に茶しぶを入れて作りますが、他は八重山上布とほぼ同じで、茶系はクール(和名はソメモノイモ)やシャリンバイ、渋い黄色はフクギ、藍色はキアイ(木藍)など島に自生している植物を使っています。布の織り方は上布などほとんど変わりませんが、緯糸に使っているブーは水で湿らせます。「湿らすと緯糸が強くなり込みやすくなって、織り段もできません」。特に黒地は織り段が目立ちやすいので注意しているといえます。

普段着として織られてきた素朴な伝統織物

八重山 交布

やえやま
グンボア



白地に細いたて縞のものは若者(男子)が着用

交布は古くから八重山地方で織られ、庶民の普段着として利用されてきた交織布です。世間にはあまり知られていない織物ですが、交布は八重山地方の伝統行事に欠かせないものになっています。石垣市の宮良地区で織物に携わっている次呂久幸子さんを訪ね、交布についてお話を伺いました。



グンボアの布地と苧麻細

年齢や役割で違う色や柄

交布の着物の丈は短めで、大体、膝とくるぶしの中間ぐらいが目安になるようです。柄も縞や格子、竹の節のようなシンプルなものが多いです。帯は主にミンサーが使われますが、帯び合わせがしやすいということもあるようです。

宮良地区の旧暦六月の豊年祭では、祭りに参加する人の年齢や役割で身に付ける交布の色や柄が区別されています。御嶽で願いごとをする司は白の麻地、四十五歳から七十三歳未満の男性は真っ黒の交布、七十三歳以上のお年寄りたちは黒地に白い筋の入ったもの、祭りでは太

う説もあります。また、古くから八重山の島々で、婦人たちの手内職として織られてきたために、特定できる産地がないことも大きな特徴となっています。

交布は自家用のため、八重山上布や八重山ミンサーなどと違い、専門に織っている人はいません。年輩の女性の中には楽しみとして織っている人もいますが、行事のときなどに織物技術を持つ人が注文に応じて作っているというのが実情のようです。

母親に教わった糸紡ぎ

次呂久さんは、幼い頃から母親が八重山上布や交布を織っている姿を見て育ちました。織物に携わって三十年になりますが、小学生の頃から母親に糸の紡ぎ方などを教わっていたといいます。特に、実家のある石垣市宮良地区の旧暦六月の豊年祭では、交布を着る慣わしがあることから、幼い頃から交布に馴染み親しんでおり、今も母親が織った交布を大切に保管しています。

現在は、亡くなった母親の実家を預かりながら工房として使い、普段は八重山上布を織っています。交布は注文に応じて織っていますが、次呂久さんは昔ながらの交布を守るために庭の一画で苧麻を育てています。



「織物は家にいなくても、健康であれば織をとつても続けられます」と語る次呂久さん



右) 緯糸を巻き込んだ杼(ひ)。左は化学繊維、右は苧麻の糸
左) 織り方は八重山上布とほぼ同じ

交布の着物。上は綿糸と芭蕉糸、中・下は綿糸と麻糸の布で作られたもの



※織り段：既に織られている部分と、織りを再開する際の織りの境目

【国営沖縄記念公園(海洋博公園)】
熱帯ドリームセンター 展示会

視覚・触覚・味覚で、 熱帯果実の魅力伝える。

夏の恒例イベント

夏、熱帯ドリームセンターの果樹温室は、トロピカルフルーツ(熱帯果実)の甘い香りに満たされます。熱帯ドリームセンター

では、沖縄国際洋蘭博覧会やブーゲンビレア展など一年を通して様々なイベントが開催されていますが、例年、夏のイベントとして『熱帯果実展』(8月1日〜31日)を開催しています。亜熱帯の沖縄では、一年を通じて様々な熱帯果樹が実を結びますが、

特に夏場は多くの果樹が実をつけます。県内では馴染み深いものもありますが、あまり見ることのない珍しいものもあり、多種多様な熱帯果実に親しみ、利用してもらいたいというのが『熱帯果実展』の大きな目的です。「お客さまを案内していると、果樹温室に入ったとたんにお客さまの目の輝きが変わり、テンションが一気に上がるのが分かります」と話すのはドリームセンター係の技師・長田尚子さん。「これは、なんとという果物?」「食べられるの?」「どんな味なの?」「私にも栽培できるの?」という質問が矢継ぎ早に飛んでくるそうです。そんなお客さまの興味や好奇心に因應するために、『熱帯果実展』では果実の展示をはじめ苗木の無料配布や無料試食会、栽培教室などをを行っています。



温室内の展示準備。お客さまが見やすいように、置き場所やバランスを考えてバナナを吊るしています

温室での 展示に初挑戦

展示会期間中、果樹温室には約100種の熱帯果樹があり、50種近くの果樹が実を結びます。「本当は樹木に実がついている状態のものをつ

「果実の展示については、これまで、果実が傷まないように冷房が可能な部屋を使っていたが、果樹と果実のイメージを結びつけやすいように、今年初めて果樹温室内に展示しました」と長田さん。「私たちにとっては普段見慣れているものでも県外からのお客さまには珍しく、『こういうふう実がついているんだ』と感動されるんです」ということで、展示物の配置につい



上: 見所は、スタッフ同士でアイデアを出して工夫しています
下: 果実は傷みやすいので、こまめに状態をチェック

ては自然な雰囲気味わってもらえるように、果実を置く場所や置き方に工夫を凝らしています。

「毎年恒例のイベントですが、昨年は『マンゴー』に焦点をあて、さまざまな品種のマンゴーを一室に展示しました。毎年少しずつ違いを出してオリジナリティのある展示をするように心がけています」と『熱帯果実展』への思いを語ってくれました。

準備と期間中の 管理運営

『熱帯果実展』開催にあたっての最大の課題は、何と言っても展示会に合わせて果樹を結実させることです。そのための肥培管理や灌水はもちろん、樹幹の一部にわざと傷をつけてストレスを与えて開花を促す(「環状はく皮

と呼ばれる)ことも行います。また、花の咲き具合や実のつき具合など毎日のチェックも欠かせません。さらに、暖かくなってくる虫が発生し、温室内に熱がこもりすぎると病気も発生しやすくなるので換気にも気をつけています。

配布用の苗木については、8月の展示会に合わせて、配布できる苗木の大きさになるまで栽培管理を行っています。配布の際は



上: 苗木の無料配布。栽培方法を記した資料も添えています
中: 無料試食会。「おいしい」の一言が大きな励みになります
下: 栽培教室。アボカドの栽培方法を聞く参加者

栽培農家との 連携や情報交換

『熱帯果実展』が近づくと、地元の栽培農家に向いて栽培方

トゲバンレイシやカカオ、コーヒーなど普段入手しにくい苗に人気が集まります。試食会については、果物の王様といわれるドリアンをメインに、赤、黄、白など彩りを考えて果実を選んで吊るして自由に取りつてもらうなど、味覚だけではなく視覚的にも楽しんでもらうようにしています。

栽培教室については、国際農林水産業研究センターや県立農業大学校などに協力をお願いし、熱帯果樹の栽培方法について実用的な話をしてもらっています。



パッションフルーツの新品種を作り出した城間正守さん(トピカルファーム「ちゅらび」)を取材

法などの情報交換も行っています。また、栽培農家を取材して知り得た情報をパネルにして、果樹栽培に取り組んでおられる方々を紹介しています。各農家がいかに愛情をもって栽培に取り組んでいるかを知ってもらうことで、熱帯果実への関心も高まり、「食べてみようかな」という消費行動にもつながります。その意味からも地域との連携や継続的な情報収集を重視していきます。

「国内で結実例のないドリアンを育て、実をつけて展示するというのが一番の夢です。そして、一つでも多くの熱帯果実をお客さまに見ていただき、沖縄でもこんなに様々な果実が育つんだということを知ってもらいたいですね」と長田さん。来年の『熱帯果実展』に、新しい果実が加わっていることが期待されます。



「お客さまに見て喜んでもらうのが何よりの楽しみです」と語る長田尚子さん

〔亜熱帯性動植物に関する調査研究〕

公園内の野鳥確認調査

海洋博公園内は、大部分が施設と多様な植栽植物で占められていますが、海岸付近や園内各所には、石灰岩の自然植生（クサトベラ群落、アダン群落、キダチハマグルマ群落）が残っており、様々な小動物たちの貴重な生息場所となっています。今回、公園内での野鳥の出現状況を把握するとともに野鳥の有効活用を図る目的で、野鳥の確認調査を平成21年の8月と10月の2回実施しました。その結果、8月の調査では、7日19科29種、10月の調査では、9日22科40種。合計は、9日24科47種が確認され、秋頃に多く観察されたことがわかりました。また、レッドデータブックに記載されている希少種は、オオコノハズク（リュウキュウオオコノハズク）、ベニアジサシ、カワセミ等12種が確認されました。公園内には、芝生地、草地、花壇、低木高木等の植栽植物及び自然植生、建造物等が点在し、人工の池や水路等も整備されています。また、公園の南側や西側は、海岸に面しており岩礁や干潟がみられます。このように比較的多様な生息環境が存在しており、環境別の鳥類相は公園の

環境を反映し、ツバメ類、イソヒヨドリ、スズメ、ハシブトガラス等人為的な環境に生息する鳥類やヤマシギ、キジバト、シロガシラ、アカモズ等灌木林や草地環境に生息する鳥類が多く記録されています。また、所々に点在する樹林で



確認されたサンコウチョウ(希少種)
写真提供：高原 建二

区分	種数
留鳥	21
夏鳥	4
冬鳥	10
旅鳥	1
旅鳥or冬鳥	10
冬鳥or留鳥	1

はサシバ、ズアカオバト、フクロウ類、アカシヨウビン、コゲラ、サンシヨウクイ、ヒヨドリ、ヒタキ類、サンコウチョウ、シジュウカラ、メジロ等の樹林性の鳥類が確認されたほか、園内ではセキレイ類、イソシギ、カワセミ等、海岸の岩礁、干潟や会場ではサギ類、シギ、チドリ類、アジサシ類、ミサゴ等の水辺環境を利用する鳥類が確認されています。今後は、野鳥の確認調査を定期的の実施し、野鳥をテーマとした環境学習や観察会に活用していきます。

(澤岬 明彦)

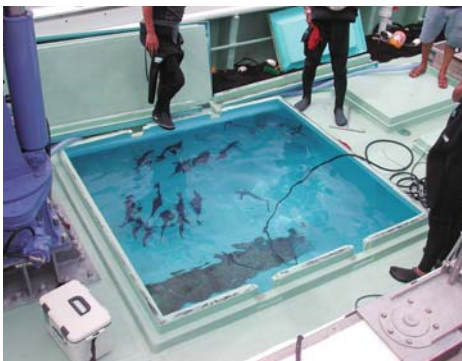
調査船「第二黒潮丸」の導入

当財団では、沖縄近海に生息する水生生物に関する調査・研究等を実施すると共に、沖縄美ら海水族館への展示及び収集・輸送を行っています。

高速で遊泳し、沖縄の沖合を北上する黒潮海流を代表する生物である、カツオやマグロ類の展示は、本部町の大型カツオ漁船「第十一徳用丸」に係員が乗船し、同船の大型活魚水槽を活用し実施してきました。しかし、同船が廃船となり、今まで行ってきたカツオ、マグロ類の収集が実施できなくなりました。また、本部町は古くから「カツオの町」として知られていましたが、この廃船により



第二黒潮丸



第二黒潮丸の活魚水槽でのカツオ・マグロ類輸送

本部町からカツオ船が無くなること懸念されていました。これらの問題を解決すると共に、当財団の調査研究の更なる向上、本部町の水産業振興発展への寄与等を目的として、調査船「第二黒潮丸」を導入しました。第二黒潮丸は、総トン数14トン、全長23m、最高速度15ノットで、最大の特徴は水量14m³の大型活魚水槽が装備され、循環ポンプで常時新鮮な海水が供給できることです。このシステムにより生物の長距離輸送も可能となりました。その他、重量物が移動できるクレーンが取り付けられ、より安全・効率的に採集・調査及びカツオ漁等が行える、多目的船となっています。

今後、これらの機能を生かし外洋性のマンボウ、カジキ・サメ類や深海生物等、沖縄近海に生息する、水生

ミナミバンドウイルカ調査

国内におけるミナミバンドウイルカの飼育は海洋博公園のみであり、当公園の大きな魅力の一つとなっています。

本種は沿岸性で、インド洋から西部太平洋、オーストラリアの熱帯から亜熱帯にかけて局所的に分布し、日本では、奄美大島、鹿児島湾、御蔵島などで確認されています。中でも奄美大島は、昭和50年に開催された、沖縄国際海洋博覧会に展示するイルカの捕獲が行われた所縁の深い場所です。しかし、現在の生息数や出現時期など、基本的なことは何も分かっていません。私たちは奄美大島周辺における本種の資源量解析のため、平成22年から地元の方々の協力の下、調査を始めました。調査範囲は目撃情報から、島の東シナ海側と瀬戸内海峡に的を絞りました。この海域に船を走らせてイルカを探し、見つけたら背びれの写真を撮影します。背びれにはイルカごとに異なった傷があることが多く、これを目印としたイルカの識別が可能です。背びれのカタログを作った新しい写真と照合し、生息数や群れのメンバー構成、移動範囲などを調べようというわけです。これまで5回の調査で得た写真と、協力者からの提供

写真を用い、識別できたイルカは約80頭になりました。もちろん背びれに傷がなく、識別できないイルカも多いので、全体数として200頭程度と推測しています。また、群れのメンバー構成はよく替わり、島の周辺に広く分布していることも分かっています。とはいえ、まだ調査は始まったばかりです。今後も調査を行い、資源量の解析に努めるとともに、他海域との関係も調べていきたいと思えます。

(徳武 浩司)



名瀬沖を遊泳するミナミバンドウイルカ



個体識別の為に両側から撮影された背びれの一部

生物の収集・輸送、調査研究や水産業への寄与等に大いに活躍することが期待されます。(仲里 美之)

【首里城に関する調査研究】

戦前の南殿の様子 國吉シヅさん聞き取り調査より

平成21年9月、戦前、首里城南殿に住んでいた國吉シヅさんに聞き取りする機会を得ました。シヅさんは大正7年生まれで、祖父は首里に住んでいた士族です。昭和16年4月、夫君清健氏が首里区第三尋常高等小学校に赴任したので、南殿の宿直を担当していた首里山川の仲吉氏からの依頼で、南殿の管理も兼ねて寄宿することにしました。南殿は黒い瓦葺きの2階建てで、1階には、9畳間と24畳間とシム(台所・土間)があり、9畳間にシヅさん家族が生活してました。24畳間には床の間があり、御庭側の窓にはガラスがはめられていました。戦争の色が濃くなってきた頃、「沖縄県社」となった首里城正殿を当時の首相東条英機が参拝しているのをガラス越しに見たといいます。南殿2階には、国王や妃が使った茶碗や厨子甕等の焼物のほか、「ヒヤクハチノタマ」と呼ばれる大きな数珠が展示されており、観覧料を徴収する案内係の女性もいました。なお、北殿には、紅型等の

今回の調査では、戦前の南殿をうかがい知ることができました。このような戦前の首里城に関する聞き取り調査を今後も積極的に活用できるよう整理したいと思えます。戦前の首里城について情報をお持ちでしたら、ぜひご一報下さいませようお願いします。

(久場 まゆみ)



現在の南殿(左)・番所(右)

【亜熱帯性動植物に関する普及啓発】

「沖繩の植栽土壌に関する 専門家講習会」 講習会

沖繩県における公園・道路等の緑化整備は国内有数の植栽量とされており、フクギ、ガジュマル等の在

来種の他、ホウオウボク、トックリキワタ等外来種まで多くの樹種が植栽されています。これら植栽木を健全に育成するためには植栽基盤の整備及び管理を適正に行う必要があり、特に沖繩県においては、独特な性質を持つ土壌や夏場の高温、冬の雨量が多い等その環境を考慮した植栽基盤の整備、管理が



川九氏による実習の様子



自然観察の様子

が分からない海草の見分け方のコツなど、沖繩に生息する14種の分類を目的とした観察を行いました。また、海草も場における棲込連鎖について解説を行いました。午後は、本部町備瀬の海岸へ移動し、実際に海岸に生息するリュウキュウスガモ、マツバウミジグサ、ウミヒルモ等の海草、貝類、エビ等の甲殻類、ナマコ等棘皮動物類など棲息生物の観察を行いました。観察後、視聴覚室へ戻り、海草、標本を用いて同定の復習を行い、質疑応答を行いました。海岸での観察時には途中で雨になりましたが、参加者は意欲的に観察を行っていました。

(篠原 礼乃)

夏休み子ども自由研究 inコンベンションセンター2011

「夏休み子ども自由研究 in 沖繩コンベンションセンター2011」は、次代を担う子どもたちに、独自の環境保全に取り組む県内の企業・産業・大学・研究機関への活動に興味をもつきっかけを与え、沖繩の



藤井氏による講義の様子

必要です。そこで、沖繩において健全に植栽木を管理するため、植栽基盤の整備及び管理技術について最新の情報を提供することを目的に、都市緑化に関する専門家向け講習会として、(財)日本緑化センターより藤井孝信氏と川九邦雄氏を講師に招き、去る6月30日に「沖繩の植栽土壌に関する講習会」を実施しました。

はじめに藤井講師が「植栽土壌基盤に関する講習会」と題して、本講習会のテキストとして用いた、当財団が平成23年度に発行した「沖繩の植栽土壌」(マニュアル)作成の経緯、沖繩の植栽事例、マニュアルの重要項目について午前中講義を行いました。午後からは川九講師が

自然の大切さを理解してもらおうと共に、夏休み期間中の子ども達への自由研究の材料提供を行うことを目的として、沖繩コンベンションセンターが開催している事業で、当総合研究センターは平成21年度より出展しています。

今年7月30日(土)、31日(日)に開催され、当総合研究センターは亜熱帯性動植物に関する知識の普及啓発を行うことを目的として参加し、展示をとおして夏休み子ども達が行う自由研究の題材につながるような企画としました。

沖繩の絶滅危惧植物や、熱帯植物の特徴ある種子の展示、サメ類の



カープヤー作りの様子

「植栽土壌診断」と題して、沖繩の土壌の特色、琉球王朝時代からの土壌研究の事例、土壌計測機器の解説を行い、屋外で各種土壌計測方法の実習を行いました。実践に即した内容であったことから、受講者から熱心な質問が多数あるなど沖繩における植栽土壌に関する知識、技術等へのニーズの高さがうかがえた意義深い講習会となりました。

(篠原 礼乃)

サンゴ礁自然誌講座 「海草と海草も場の生物観察」



講義の様子

本講座は、7月2日に当財団西平守孝参与を講師に、当財団総合

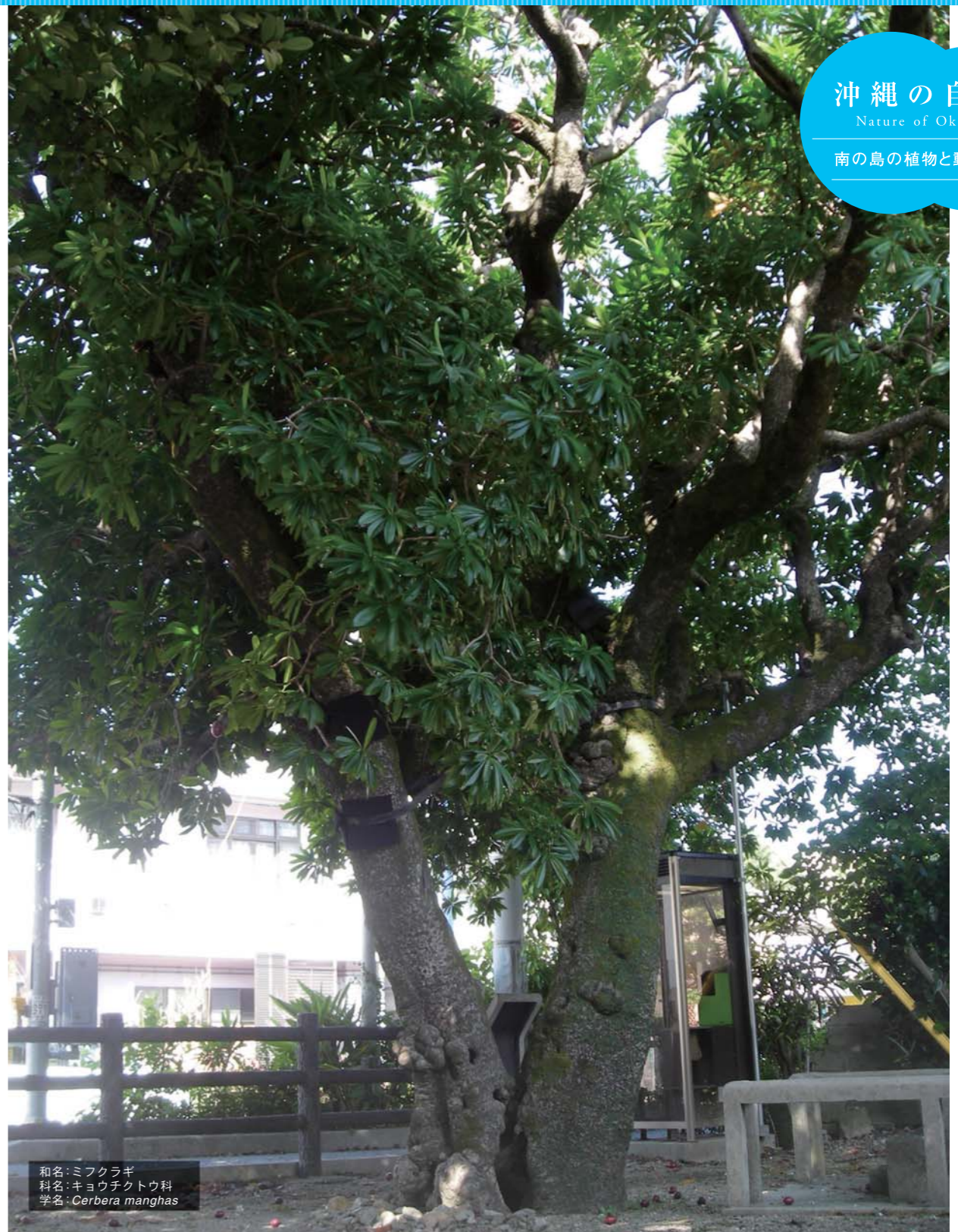
顎部骨格標本、サンゴ類、ウミガメ等についての展示を行いました。今回は、沖繩各地の海砂や、星砂、チリメンモンスター(チリメンジャコ)を選別する前の状態で様々な生物が混じっている状態のもの、稚魚の透明標本を顕微鏡で観察するコーナーを設置したところ、多くの方に見学いただきました。

また、別会場において1日3回「子ども凧カープヤーを作ろう」と題し、沖繩の子ども用の凧作りの工作室も開催し、親子で協力しながら凧づくりを楽しんで頂けました。

(篠原 礼乃)



顕微鏡を覗いて観察



和名:ミフクラギ
科名:キョウチクトウ科
学名: *Cerbera manghas*

シリーズ 沖縄の大木 ⑭

ミフクラギ

ミフクラギはキョウチクトウ科の常緑高木で、別名、オキナワキョウチクトウとも呼ばれ、琉球列島をはじめ奄美大島以南の台湾、中国南部、マレーシア、ポリネシアにかけて分布しています。海岸近くに多く自生し、5月頃から白い美しい花を樹冠一面につけ、10月から12月にかけて紫紅色の果実（6〜10センチ）を熟させます。成熟した果実は木質状で繊維が多く、海水に浮いて漂流します。木の傷口から出る乳液は有毒で、この液が目につくと目が腫れるので「目腫木」（めふくらぎ）が和名となっています。

強健な性質で生長が早い樹であり、街路樹・防風林・防潮林・公園樹として植栽されています。

沖縄県名護市東江のミフクラギは、推定樹齢約220年、地際部では330センチ、樹高11メートルあります。この木は、地上から約70センチのところまで幹が2つに分かれ、それぞれの胸高周囲は202センチと151センチで県内のミフクラギの中では最大級、昭和48年6月15日に名護市の天然記念物に指定されています（名護市教育委員会）。

この敷地内には小さな祠があり地元では、「キツチャ（木の下にある祠）」と呼ばれ、テイラヤマ（周囲の山々）を拝礼し、古くから八月の豊年祭、十月吉日のピーヌウガン（火のお願）があり重要な拜所とされ常に、掃き清められ大切に守られています。球形をした樹冠の長いところでは約12メートルあり、その緑陰で子供たちが遊び、お年寄りたちが涼む風景が見られ、区の見学ポイントとされています。（久高 弘輝）

シリーズ 沖縄の希少動植物 ⑭

植物 日陰地に咲く白い花
タイワンシシラン



本種は沖縄本島北部の山地に生育する常緑の小低木です。茎は幹や岩に着生するコケの中を這い、疎らに出した枝の上部の葉腋に花をつけます。自生地は高木のクスノハカエデ、イスノキやホソバシヤリンバイ、ヒゼンマユミといった中木が混生して半日陰の環境となっており、周辺にはノシラン、ユウコ克蘭、ミドリカタヒバ等、湿気のある環境を好む草本が見ら

れます。

これまで台湾固有とされていましたが、1994年に初めて県内での生育が報告されました。台湾産は淡紅色の花をつける一方、沖縄産はすべての花色が白色であり違いがみられます。県内でも自生地は2カ所しかなく、もともと個体数が極めて少ないこともあり、絶滅の危機に瀕しています。

（下地 俊充）

和名:タイワンシシラン
科名:イワタバコ科
学名: *Lysionotus apicidens*
レッドデータカテゴリー:
絶滅危惧IA類(沖縄県)、絶滅危惧IA類(環境省)

動物 海草・海藻類が主食
アオウミガメ



アオウミガメは世界中の温暖な海域に生息し、日本の主な産卵上陸地は、小笠原諸島や屋久島以南の南西諸島で、沖縄県の砂浜では5〜8月頃に産卵が見られます。背甲（甲羅）の表面は、滑らかで磨かれたように見え、卵形をしています。植物食の傾向が強い種類で、海草や海藻類を主食としています。食用や剥製として利用されてきたことや、生息環境の悪化から、生息数は減少したとされていますが、国内における近年の調査結果によると、産卵回数は増加傾向にあります。現在の生息数については不明ですが、当財団では産卵調査や死体漂着調査を通し、アオウミガメの情報収集に努めています。（木野 将克）

和名:アオウミガメ
科名:ウミガメ科
学名: *Chelonia mydas*
方言名:ミジガミー
レッドデータカテゴリー:
絶滅危惧II類(沖縄県)、
絶滅危惧II類(環境省)

はえ 蠅が手を擦り合わせるわけ

昔々ね、蠅と雀がいたがとても仲が悪かったそうです。

蠅はあるとき、雀のことを困らせようとして王様に告げ口に行ったそうです。「王様、実は雀のやつが悪いことをしています。それは、人々から集めた米を蔵に収めていますが、その米を雀が盗んで食べています。どうか罰して下さい」と蠅は得意そうに報告したそうだ。王様は、とても大切な米を盗んで食べられているという話を聞いて、何も深く考えずに怒り出し「なんと、雀のやつはけしからん。罰してやるから今すぐここへ呼び出せ」と家来達に命じました。

雀は、急に王様の所へ呼び出されたので、いったい何だろうと心配しながらやってきました。雀は王様に「何か御用でしょうか」とおそろおそろ聞ききました。王様は怒りながら「雀よ、お前は何かをしようとしているんだ。人々が汗水流して一生懸命作った米を盗んで食べているそうではないか。許し

てはおけない。きつく罰してやる」と言いました。雀は、その話を聞いて「いいえ、王様。誤解でございます。確かにわたしは米を食べているのですが、米蔵の外に落ちている米粒を拾って食べているのでございます。米蔵に運ばれていくときに米粒がいくつか落ちていきます。もったいないので、わたしはそれを掃除の代わりにきれいに食べているのです」と答えた。

王様は、雀の話を聞いて「ああ、なるほどそうだったのか。掃除をしてくれているのか。いや、蠅がな、お前が米を盗んでいると言っていたものだからつきりそうだと思っていたのだ」と話しました。雀は「そうか、なるほど。蠅のやつがわたしのことを困らせようとわざと王様に言ったのだな」と思いました。

そこで雀は「王様、本当は蠅のやつがとんでもないことをしているのです。王様にと作ったご馳走を、王様がいらっしやらない

前にご馳走の上に飛び降りて食べているのです。それもあの蠅のやつは便所やらいろんな所を飛び回ったあと裸足のままでご馳走を触っているのです。そのあとに王様にご馳走を召し上がっているのです」

雀の話を聞いた王様は、びっくりと同時に怒りだして「なんと、けしからん、蠅のやつめ。すぐに蠅をここへ呼び出せ」と家来達に命じました。

ところで蠅は「雀は今頃は罰せられて、代わりにわたしはご褒美をもらえるのだから」と思っていたので、喜んで王様のところへ急いでいきました。王様のところへいくとそこには平然と雀もいました。「あれ、おかしいな」と不思議に思いながらも蠅は王様に「王様、わたくしの言うとおりでございました。雀のやつは悪いやつです」と自慢そうに言いました。すると王様は「お前の言ったことは違っていたではないか。雀は落ちている米粒を掃除しながら拾って

いたというではないか。これは逆に褒めていいことだ。蠅よ、実はお前の方が悪いことをしているではないか。お前は、わたしのご馳走をわたしより先に汚い足で触りながら食べているそうだな。その残りをわたしが食べているということになるな。こんな無礼なことは許せない。お前を罰してやる」ひどく怒りながら言いました。

すると蠅は「ああ、すみません。どうかお許し下さい。もう二度としません。罰するのは許してください。」と泣きながら謝ったので、王様は「本当に反省するのだな。お前は王であるわたしに嘘をついた。また雀を困らせようとした。だから詫びを入れ、それを子々孫々まで代々つないでいきなさい」と命じました。

だから、蠅が坐るときには、前の手二つは王様へのお詫びのおじぎで「ウー トー トウ」とお祈りするようになって、後の手二つは雀へのお詫びで「すみません」と手を擦り合わせているそうだ。



海洋博公園管理センター

公園全体で遊ぶ

海洋文化館で遊ぼう

- 10月8日(土)・9日(日)・10日(月/祝) 10:00～17:00
- ①星座シート作り(定員50名/日)
- ②貝から工作(定員100名/日)
- お問い合わせ/業務課 TEL0980-48-2741



オータムフェスティバル

- 実施日: 11月3日(木/祝)～6日(日)
- お問い合わせ/業務課 TEL0980-48-2741

場所 海洋博公園内 無料

鬼餅作り体験

- 実施日: 12月上旬
- 定員30名・要予約
- 小学生未満は保護者同伴
- 鬼餅ふるまい(1日500個) 13:00～無くなり次第終了
- お問い合わせ/業務課 TEL0980-48-2741



場所 おきなわ郷土村 無料

生き物とふれあう

マナティーのもぐもぐタイム

- 10月8日(土)～10日(月/祝) 15:30～15:35, 15:40～15:45, 16:30～16:35, 16:40～16:45
- 定員:なし 自由観覧
- 40名程度参加可能
- お問い合わせ/海獣課 TEL0980-48-2748

場所 マナティー館 無料

マナティーの能力(ちから)～こきゅう～

- 10月15日(土)～16日(日) 10月22日(土)～23日(日) 15:30～15:50
- 定員:なし 自由観覧
- 40名程度参加可能
- お問い合わせ/海獣課 TEL0980-48-2748

場所 マナティー館 無料

イルカ学習会

- 12月23日(金/祝)～1月2日(月)
- 定員:なし 40名程度参加可能
- お問い合わせ/海獣課 TEL0980-48-2748

場所 パークセンターおよびイルカラグーン周辺 無料

冬休みマナティーしく体験

- 12月23日(金/祝)～1月15日(日)の土・日・祝日 13:30～14:25
- 申込方法:当日抽選(定員20名)
- 受付時間:12:30～13:25
- 受付場所:マナティー館前
- 参加条件:小学生以上(小学生は保護者同伴) ※保護者も定員に含む ※車椅子、障害を持つ方のご参加の場合事前ご連絡要
- 定員:20名/日
- お問い合わせ/海獣課 TEL0980-48-2748

場所 マナティー館 無料

花と緑とふれあう

沖縄のラン切花展

- 10月15日(土)～23日(日) 8:30～17:30(入館は17:00まで)
- ショートブーケづくり教室
- 10月16日(日)・10月23日(日) 11:00～12:00, 14:00～15:00
- 要申込み 定員:20名/各回
- お問い合わせ/植物課 ドリームセンター係 TEL 0980-48-3624



場所 熱帯ドリームセンター 入館料のみ

ブーゲンビリア展

- 11月3日(木/祝)～23日(水/祝) 8:30～17:30(入館は17:00まで)
- お問い合わせ/植物課 ドリームセンター係 TEL 0980-48-3624

場所 熱帯ドリームセンター 入館料のみ

ハイビスカス展

- 12月 8:30～17:30(入館は17:00まで)
- お問い合わせ/植物課 ドリームセンター係 TEL 0980-48-3624

場所 熱帯ドリームセンター 入館料のみ

緑化植物セミナー

- 12月
- お問い合わせ/植物課緑化相談係 TEL 0980-48-3782

場所 熱帯・亜熱帯 都市緑化植物園 無料



苗木の無料配布

- 10月9日(日)・16日(日)・23日(日) 13:30～無くなり次第終了 1日1,000鉢、お一人様一鉢限り
- 10月9日(日)

場所 中央ゲート噴水広場 無料

- 10月16日(日)・23日(日)

場所 熱帯ドリームセンター 無料

- 10月中毎日 8:30～無くなり次第終了 1日100鉢、お一人様一鉢限り

- お問い合わせ/植物課緑化相談係 TEL 0980-48-3782

場所 熱帯・亜熱帯 都市緑化植物園 無料

植物のクラフト作り

- 10月1日(土)～12月25日(日) 毎日開催
- 10月:葉っぱで遊ぼう! ハブグワを作ろう
- 11月:ミニクリスマスリースを作ろう! ミニタペストリーを作ろう!
- 12月:ミニクリスマスツリーを作ろう! まつぼっくりでミニ門松を作ろう!
- お問い合わせ/植物課緑化相談係 TEL 0980-48-3782

場所 熱帯・亜熱帯 都市緑化植物園 無料



総合研究センター開催のイベントでは、フィールドで見つけることのできる動植物やその標本を、身近な道具や顕微鏡等を用いて観察します。そして、生物の不思議さや面白さ、観察のしかた、生態系や環境の重要性などを紹介します。

美ら海自然教室

■ヤシガニのことを知ってみよう

- 10月15日(土) 13:00～15:00
- 総合研究センター視聴覚室 / 無料 / 定員:20名(小学校・中学生以上対象)

■沖縄のジュゴンを

- 12月3日(土) 13:00～15:00
- 総合研究センター視聴覚室 / 無料 / 定員:20名

■甲殻類 エビの秘密を探る

- 12月17日(土) 13:00～15:00
- 総合研究センター視聴覚室 / 無料 / 定員:20名



平成23年度美ら海自然教室「甲殻類カニの秘密を探る」の様子

美ら島自然教室

■セミの秘密を探る

- 10月8日(土) 13:00～15:00
- 総合研究センター視聴覚室 / 無料 / 定員:20名

■アサギマダラの渡りの秘密を探る

- 11月12日(土) 13:00～15:00
- 総合研究センター視聴覚室他 / 無料 / 定員:20名

美ら島・美ら海こども工作室

■実と種子でクラフトを作ろう

- 10月1日(土) 13:00～15:00
- 総合研究センター視聴覚室 / 無料 / 定員:20名

講演会

■アジアのラン

- 11月26日(土) 13:30～15:00
- 総合研究センター視聴覚室 / 無料 / 定員:50名

【お問い合わせ】総合研究センター 普及開発課 TEL 0980-48-2266

※各イベントの申し込みは、実施日の2ヶ月前より開始いたします。
※各イベントは、内容の変更や中止となる場合がございます。最新情報や詳細は、HP(kaiyohaku.jp)等でご確認して頂くかお気軽にお問い合わせください。

首里城公園管理センター

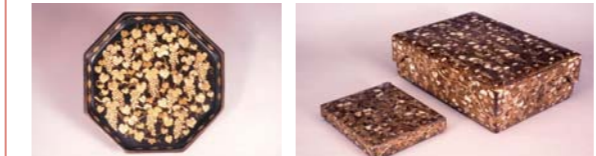
首里城公園企画展

首里城のデザインⅡ

～葡萄と栗鼠 王の玉座を飾った異国の模様～

- 期間:平成23年10月7日(金)～12月22日(木)
- 場所:首里城公園 有料区域 南殿2階 特別展示室
- 内容:約450年の間、琉球王国の象徴であり、琉球の人々が世代を経て崇め敬っていた首里城正殿。その正殿で使われた模様の中から、玉座を飾る「葡萄と栗鼠」模様でデザインされた琉球漆器を、ぜひご覧下さい。

■主な展示品



黒漆葡萄栗鼠螺鈿絵八角盆
くろうるしぶどうりすらでんはくえはっかくほん
葡萄と栗鼠は、琉球漆器によく使われる模様の一つで、夜光貝などを用いた螺鈿細工と箔絵の技法で葡萄・栗鼠を描いています。

黒漆葡萄栗鼠螺鈿箔絵紙箱・視箱
くろうるしぶどうりすらでんはくえりょうしほこすずりほこ
葡萄と栗鼠を螺鈿と箔絵技法で描いています。たわに実った葡萄と、子供をたくさん産む栗鼠は多寿・多福をあらわすめでたい模様で、琉球漆器によく使われる図案です。

首里城のデザインⅢ ～Shurijo & Dragon～

《首里城公園開園20周年記念イベント》

- 期間:平成23年12月23日(金/祝)～平成24年3月1日(木)
- 内容:連続企画展の第3弾。平成24年は辰年であることと、首里城公園開園20周年でもあるため、そのイベントとして国王の象徴で、首里城で最も目立つ龍のデザインをあしらった工芸品を中心に紹介していきます。

※首里城南殿2階特別展示室は有料(入館料が必要)です。

平成23年度 首里城祭

- 日時:10月28日(金)～11月3日(木)
- 場所:首里城公園、那覇市国際通り
- 内容:①伝統芸能の宴
10月28日(金)～30日(日)
②万国津梁の灯火と地域伝承芸能の宴
10月29日(土)～30日(日)
③琉球王朝絵巻行列
10月30日(日)
④首里城祭特別公演「舞への誘い」
10月31日(月)～11月1日(火)
⑤琉球王朝祭り「古式行列」
11月3日(木/祝)

平成4年に首里城公園の開園記念イベントとして開催されて以来、毎年開催されているイベントです。1万本のキャンドルで彩られた公園内で披露される伝統芸能や那覇市国際通りで行われる約1000名の絵巻行列は必見です。

首里城無料ガイド

- 日時:毎日実施 10:00、13:00、15:00
- 場所:首里城公園有料区域 御庭～南殿・番所～書院・鎖之間、正殿、北殿
- 歴史衣裳を着た案内員による、首里城無料ガイドを毎日実施しています。首里城のことをもっと詳しく知りたい方にはぜひお勧めです。南殿入口が集合場所となっていますので、開始時間の5分前までにお越しください。各回先着15名様まで!

FM沖縄「風に吹かれて首里城めぐり」

毎週木曜日朝9:45から5分間、FM沖縄「Hello Good Day」内の1コーナーにて、首里城に関するへえ～と思う様々な話題をお送りしています。

ポッドキャスト配信 <http://blog.fmokinawa.co.jp/shurijo/podcast/>

【お問い合わせ】首里城公園管理センター TEL 098-886-2020

※各イベントは内容の変更や中止となる場合がございます。最新情報や詳細はHP(oki-park.jp)等でご確認して頂くかお気軽にお問い合わせください。